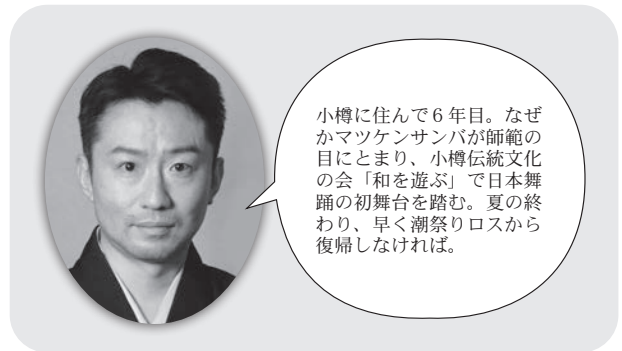


## 誕生日プレゼントは保健の授業

北海道社会事業協会小樽病院産婦人科・  
医療安全管理室

くろだ たかふみ  
黒田 敬史



小樽に住んで6年目。なぜかマツケンサンバが師範の目にとまり、小樽伝統文化の会「和を遊ぶ」で日本舞踊の初舞台を踏む。夏の終わり、早く潮祭りロスから復帰しなければ。

### ～プロローグ～

小樽協会病院で分娩を再開した5年前、施設外分娩（自宅や車内など産科施設以外での分娩）の救急搬送依頼が目に見えて多と感じ、おたるレディースクリニック院長・小林寛治先生とともに小樽市に報告した。周産期シミュレーションチームHOPPIEの同志である北海道大学産婦人科助教・齊藤良玄先生が算出したデータでも、小樽後志地方は施設外分娩数が多いことを示す赤色で北海道地図の左肩を染めていた。妊婦が未受診なままであったり、施設外での分娩となると、妊娠中や分娩時の母子の評価ができず、または対応が遅れ両者にとって命に関わる転機となるリスクが高い。

とはいえ病院にいる私たちに何ができるだろう。果てなく長い道のりになるが、地域住民や次世代層、つまりは学生に性へのリテラシーを高める過程で、「困ったり悩む前に病院において」という医療者の声を届けられないだろうか。

### ～小樽の小学校、保健の授業編～

「地域や学校で性教育への力の入れ方には差がある。小樽は全然足りてないみたい」と子供が通う小学校にボランティアで出入りする妻から情報を得た。校長先生と面談すると、過去の勤務先では必要性を感じて熱意をもって教えられる保健教諭がいて実施できたこともあったが、継続するのが難しいのだそうだ。日本思春期学会認定講習、そして性教育を先駆けた全国の知人から受けたアドバイスを参考に、あくまで学習指導要領という矩を躰えず、学校の先生が授業で扱いにくく困っているところを任せてほしい！と伝え、小学校高学年の保健「受精のしくみ」「男女の体のちがひ」の2コマで授業をいただいた。

児童にとって「長い45分の授業」を「あっという間のまた受けたい授業」にするため、老舗テレビ番組の力を借りて授業のタイトルを「世界いのちのふしぎ発見！」とした。子供が喜びそうなピンポンバザーも班の数だけ購入し、校長先生の顔写真を貼った。ヒトシくん人形の代わりにミツルくんがピンポン！と立ち上がる仕掛けだ。

さあ授業開始。「みんなのいのちはどこにあるの？」「じゃあ心は？」「いのちはどこからはじまるの？」最新ジブリ映画さながらの根源的な質問

を投げかける。「頭！」「胸！」「どっちも！」「空から」「そんなわけねえだろ！」「せいきてなに！？」途端に吹き飛ばされそうな子どもの熱波を全身に浴びる。「受精卵のサイズは？」「お腹の中に赤ちゃんはどのくらいの間いるの？」時間いっぱい班で必死に相談し、前のめりになって手を挙げピンポンを鳴らす児童の姿を見て、大人はこの好奇心をどこで手放してしまうのだろうと思った。CM「この木なんの木」のサプライズ動画。弾き語りしてるのは…校長先生だっ！！児童のテンションが最高潮になる。ラストミステリー「みんなが今と全く同じ体で生まれてくる確率は？」みな指さして必死に分母の桁数を数える。「…奇跡…？」自信なさそうにひとりの女子がささやいた時、私は頷きスライドに生まれたての娘の写真を見せた。ちょうどこの日は私の娘の誕生日。パパの「いのちの授業」というプレゼントを喜んでくれたようだった。

Inspire the next “Generation” 未来へ想いを込めながら、私の小樽後志「命の授業」の道はまだ始まったばかりだ。

今回は「小樽商大プレコンセプションケア編」でまたお会いしましょう！世界、いのちのふしぎ発見！！

